

全体討論

パネラー：荒木 敏夫
金子 修一
古瀬 奈津子
加藤 謙吉
石見 清裕
矢野 建一
司 会：飯尾 秀幸

飯尾：討論を開始します。質問用紙で質問をお寄せいただきました。各報告者宛てのもの、複数の先生に1枚の質問用紙に書いてくださったものがありますけれども、最初に、お一方ずつを対象とした質問について、それぞれの先生にお答えしていただくかたちをとらせていただきます。ひとわり終わりましたら、会場にいる皆さんに挙手していただいて各先生を指名していただいて質問をしていただくかたちになります。とりあえず個別の報告に対して質問を受けるとするかたちをとらせていただきます。

それでは早速ですが、最初の金子先生あての質問です。

金子：ご質問ありがとうございます。お名前は読み上げないで中身だけで失礼します。1つは「冊封体制が魏晋南北朝時代に効果があったが、唐王朝ではうまくいかなかった。日本は唐代では冊封を受けていない。唐王朝でうまくいかなかった原因はどこにあるのかと、前漢を唐と比べると国力は唐がはるかに上と考えられるが」ということですね。

おそらく、この方の質問というのは、魏晋南北朝では、倭の五王なんかが、倭国王、倭王、あるいは安東将軍とか、使持節都督何とか諸軍事という称号を得たのに、隋唐ではそれをもらっていなかったというふうなこととからんでの質問だと思います。先ほど話した中で、西嶋氏と堀氏の説をかいつまんで説明したので、丁寧に説明したわけじゃなかったんですが、堀氏のほうは、魏晋南北朝時代というのがいちばん冊封が有効に機能した時代であると、西嶋氏のほうは、私の話の中では直接文書で引用しませんでしたけど、むしろ、唐代のほうに力点を置いて考えているというところがあります。そのこととからんできていると思うのですが、実は唐代で日本が冊封を受けなかったということについてはいろいろな解釈があるわけで、これは日本史の方々もいろいろな点でご興味、ご関心をお持ちのところだと思います。その話をこれからするわけにいかないんですけども、魏晋南北朝で効果があったというのが、倭の五王なんかのからみでいうとそのとおりなんですけれども、それを西嶋氏の考えと堀氏の考えとで同じであるかということ、ちょ

っと話はややこしくなっちゃかなと思います。

あとは唐代なんですが、それこそ結局うまくいかなかった原因と言いましょか、日本が王なり倭王なりという称号をもらわなかったという隋以後のその問題、日本が隋のときには対等を要求したというのは国書で明らかであるわけですがけれども、そういう隋朝における日本の態度を、果たして唐まで引っ張って、唐代でも日本は対等な態度を要求したと考えてよいか否か。あるいは実は唐代ではむしろ朝貢国と位置付けていたかというふうな問題とからむので、これは残念ながらこの場ではお答えできないといえますか、むしろこのことこそが今後の課題であるということで、別に逃げるつもりはありませんけれども、時間の関係で具体的なお答えは控えます。

ただ、このことに関連して昨日から荒木先生が、隋、唐が建国してから日本が使節を送るまで非常に時間がかかったのはなぜか、それをどう考えるかという問題を提起されましたけれども、卑弥呼ですよ。卑弥呼の遣使はいつかと考えると、あれは魏が帯方郡を陥落させた翌年。帯方郡というのは明らかに日本との交渉の窓口になっている。それから次に266年という年に、西晋の都の洛陽まで日本の使節が行っているわけですがけれども、その晋が建国したのは前年の12月ですよ。それから倭の五王のいちばん最初の讃の遣使はたしかあれは宋王朝建国の2年目。ということで、それこそ南北朝までのほうが日本は敏感に反応している。ところが隋・唐になると、少なくともそういう面で見るとは反応が敏感でなくなる。おそらくこれは朝鮮半島の動きと関連しているんでしょうけど。情報網という点から考えると逆の現象があらわれる。ですからこのご質問は、そういうテーマこそ我々にとっても非常に重要なテーマであるということで、具体的に私の意見を話しますと、たぶん9時までかかっても終わらないんじゃないかと思しますので、これは申しわけございません。そういう点では参考になる質問だったということで失礼させていただきます。

その次は、西嶋先生、堀先生の議論は承服できない、中国の冊封に基づいて文化や政治というのが被冊封国に流入するというのは一方的な流れを感じる。東アジアは西域を含めて地勢的な定義で十分であって、したがってそれ以上のことを東アジア世界というふうなことで、メカニズム的なものとして考える必要はないんだと、ご質問はそういうふうな意味だと思うんですけど。実は西嶋氏の冊封体制論が出たときに、同じような批判が出まして、特に朝鮮古代史を研究している方からそういうご批判が強くなりました。それはやっぱりおっしゃるようなことで、結局、被冊封国の主体的な努力というものを一方的に無視するといえますか、すべてを大国である中国の立場から説明することにならないかというふうなことですね。ですから、こういうふうな考え方が出てくるということはいくわかるんですけども、例えば先ほど話の中でも触れたんですけども、前秦と東晋から高句麗が同じような称号をもらっている。もっともこれは堀先生のお考えなので承服できないといったらそれでおしまいかもしれませんけれども、そういうふうな称号を、おそらく高句麗のほうから申し出て、前燕からもらった称号を東晋からも受けようとしたんじゃないか。つまり称号の授与そのものが一方的な授与ではなくて、もらうほうの側に必要性があるからもらうんだということ。これは『宋書』倭国伝なんかにも、征西將軍倭隋ほか十数名の將軍号を要求してそれが授与された。あるいはそれ以外にも軍・郡を、將軍号とかそれから、都督諸軍事だと思んですけど、そういった称号を授与されるように要求してそれが認められたという

事例があるし、これらはたしか百済にもありますね。百済のほうでは自分のほうが要求しておいた称号を宋王朝からもらう。要するに、この称号の授与というのは少なくとも一方的ではなくて、受け手のほうが要求しておいて、倭王の都督百済諸軍事称号が授与されたかどうかは別問題として、部下の武官の称号については比較的容易にもらえるわけですね。堀先生なんかは、そういう国内の身分的な秩序を編成していくうえで、すでにそういった秩序として出来上がっている將軍号というものを国内用に転用したんじゃないかというように解釈します。ですから、これは決して一方的なだけの方向ではないということですね。

それからあと、唐代ですと、「渤海郡王」という称号が非常におもしろいのですが、実は「渤海郡王」という称号は唐の初めには唐国内の人が受けている称号です。渤海国の本来の国号は振国ですよ。ダルビッシュの三振13個のあの「振」、あるいは地震の「震」ですけれども、ああいうふうな震(振)国と言っていたものに対して唐は「渤海郡王」の称号を与える。そのあとに「渤海国王」という称号を授与されると、実は唐の国内で「渤海郡王」という称号をもらう人が出てくるわけです。ですから、明らかに「渤海郡王」というのは唐王朝で通用した称号を渤海に与えているんですね。ところが渤海の使節が日本に最初に来たときの日本側の記録を見てみると、「渤海郡王」とある。決して中国側の史料だけではなく、日本側の史料にも「渤海郡王」と書いてあったということは、渤海は「渤海郡王」という称号を日本に来たときに名乗っているわけです。こういうかたちで見ますと、そういう称号の授与というのが、中国側の判断だけで授与された、それがまったく一方的なものであったということではないと思うんですね。やっぱり受け手のほうもそれをいろいろなかたちで利用しようとしていると。それがしかも国内だけではなくて、特に渤海なんかの場合には、日本と初めて国交を結ぶときにそういう称号を用いるということがあるわけですから、大国中国の、力にもものを言わせてみたい、もしそういう考え方で冊封ということを考えるのであれば、必ずしもそうではないということがやっぱり史料のうえから言えるのではないかと思います。

あまり1人でしゃべっているわけにいきませんが、あと1点、九州と中国、朝鮮と、秦漢以来の積極的な交渉があったか否かと、ご質問をそういうふうに取り上げればよろしいでしょうか。私は文献史学ですので、考古学的なことからお答えすることはできませんけれども、例えば『魏志』倭人伝の中では、対馬について、耕地がなくて、産物だけでは食べていけないので南北に市糶(してき)するとあって、要するに交易をして、市糶(してき)の「糶」という字は「かいよね」という字なんですけど、文字通り読むと米を買い入れるという。それから一大國、壱岐なんかについても、対馬よりは耕地はあるけれども、やはりそれだけでは十分じゃないので、南北に市糶するというふうにして書いてある。要するに交易して穀物を買入れるというふうにして書いてある。ということで、文献から見ても、これは3世紀代のことになりますけれども、朝鮮半島との交易ということは考えてよからうと思います。

あとそれから先ほど言った帯方郡なんかは、後漢から朝鮮半島と倭国との交渉の窓口になっていたと考えていいんじゃないかと思うんですね。そういうことで、漢以来の九州と朝鮮の交渉というのは文献解釈のうえで認められるのではないかと、私なんかは思います。急ぎましたけど以上です。

飯尾：次は古瀬先生お願いします。

古瀬：ご質問いただきましてありがとうございます。たくさん日本史関係をまとめてお寄せいただきました。

まず1つ目は留学生は向こうに留学している時期に財政的な支援を中国から受けていたのか。留学生は受けていたけれど、請益生の場合はどうだったのかということだと思いますが、請益生も、日本から中国に行って、中国で移動しているとき、滞在費は向こうもちです。ですから、よく言われているのは、8世紀になりますと、遣唐使の航路が南路になりまして、揚子江沿岸に到着するのですが、揚子江の沿岸部から長安に行くわけですが、人数制限をされるわけですね。その1つの理由は、移動の間の費用が全部中国もちだということがあって、400~500人の全員を長安まで行かせるのは非常に費用がかかるということもある。つまり向こうにいる間は基本的には唐の側が接待といえますか、費用をもつということになっていたと思います。

それから、日本から行った留学生が、唐で他の国々の留学生と交流があったかということですが、具体的に中国、唐以外の人との交流があったという話はあまり残されていないのではないかと思いますけれども、実際にはいろいろあったのではないかと思います。ただ、唐側は、中国人と日本人との交流なども、特に前期のころは抑えようとしている面がありますので、唐の人と日本の遣唐使との交流も、あまりさせないようにしていた。そういうことですから、他国の留学生とそんなに頻繁に交流があったかどうかというのは、ちょっと疑問があるかなという気はします。唐側が、中国人と日本人との交流をあまり進めていなかったということは、1つにはやはり唐の文化やさまざまな情報を外国人にはあまり教えたがらないというか、文化の流出を防ぐという意味もありましたので、積極的な交流というものには抑制していたということです。

次に、中国の政治制度を取り入れた日本で、なぜ宦官の制度が取り入れられなかったのかという質問です。他の国々ではどうだったのでしょうか、他の国にはあったと思います。朝鮮にもありました。ですから、日本でなぜ取り入れなかったかということを考えると日本の特徴がわかるのではないかと思います。日本の場合は宦官の制度は取り入れていません。中国の宦官はどのような役割を果たしていたかということ、後宮と外部との間をとりもつという役割を果たしていました。中国の後宮は外部から遮断されているんですね。江戸城の大奥みたいなもので、外との接触がないわけです。日本の場合、特に古代の後宮というのは、外部との接触は割合に自由な世界なので、女性を閉じ込めておこうということはないのです。ですから宦官の役割の1つは日本では機能しなかったというか、必要なかったということはあると思います。

それから、遣唐使のうちで数学を学んだ人はいたかという質問ですが、史料のうえでは見られませんけれども、日本の大学寮は、中国の国子監の制度を真似たものでして、その中には数学といった学科もあるんですね。算木を使っていたということが書かれています。その内容がどの程度のものだったのかといいますと、土地制度などを考えてみると、かなり進んだ数学的な知識がないと班田収授その他のことができないわけで、史料のうえではあまり残されていませんけれども、数学を学んだ人々もいたと思いますし、遣唐使を通じていろいろ新しい数学などが日本に入ってきたということはあるはずですよ。

それから、同じようなご質問ですが、先ほどの留学生、吉備真備のように17年間も鴻臚寺ですと学んでいたような、留学していた人の場合、初期の費用は日本から支給されたとしても、大部分は唐で負担したのかという質問ですが、たしかに行くときには朝廷から賜り物ももらっていますので、こちらから用意して行っていますが、向こうで滞在している期間は向こうもちということですね。ですから、何年間留学していただけるかというような年限もだんだん決められてきて、期限が切られるようになっていくのだと思います。

それから、秦大麻呂（はたのおおまろ）の『問答六卷』の内容について質問です。青木和夫氏説によると、秦大麻呂は『古記』の作者ですから、内容は律令に関するものだったと考えられているわけですが、秦大麻呂が『古記』の作者かどうかというのがよくわからないので何とも言い難いところです。というのは、留学生とか請益生という用語自体は、正史にもみえますし、『入唐求法巡礼行記』にもみえていて、基本的には儒教の留学生なのです。ですから、問答といったときに本当に律令関係のものだったのかというのは、確かかどうかかわからないと思っているところです。この点どなたかお考えがあったら聞かせていただければと思います。

9世紀における学問の多様化や技術の重視と報告で述べましたけれども、史料的な制約の可能性はないのか、というご質問です。たしかに8世紀の『続日本紀』、特にその後の『日本後紀』は欠落がありますので、史料的に少ない時期のものは残っていないのかもしれないですね。実際には別に儒教の留学生だけではなくて、ほかの留学生も行ってた可能性もあると思います。ただ、承和の遣唐使というのが、それ以前の延暦や宝亀の遣唐使と違うと思うところは、『続日本後紀』や『文徳実録』の時代になって、確かに詳しくはなっているのだとは思いますが、『三代実録』ほどは詳しくはなっていないと思うので、その時期に承和の留学生という言葉でみえます。また、宝亀と延暦については、史料的な制約があるにもかかわらず、帰国後の帰朝報告が非常に詳しく残っています。宝亀と延暦の遣唐使の帰朝報告は基本的には構成が非常によく似ているんです。『続日本後紀』の承和の遣唐使の場合は、それが残っていないというのが、逆に承和の遣唐使のことを考えていくときに、それ以前と違っている部分があるのではないかと感ずるところがあると思います。

それから、藤原刷雄ですが、入唐していないというように申しました。通説では入唐していないと考えられていると思いますが、特に私自身の考えがあるわけではなくて、通説に従って入唐していないとご説明いたしました。刷雄が仲麻呂の乱のときにほかの仲麻呂の子どもたちは殺されてしまったのですが、1人だけ命を救われて配流になったのは、留学生の経験があったからではなくて、通説的には出家していたことがあった過去に出家して仏道に励んでいた時期があったというのが理由になって1人だけ配流になったということです。ですから留学生の経験があったから命を救われたということではないと考えられていると思います。

それから、春苑玉成が中国から新しい宣明暦を持って帰って来なかった理由ですが、暦のことは詳しくないのでよくわからないので教えていただきたいです。宣明暦がいつできたかも知らないのですが。

シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア：839年です。

古瀬：そうすると承和の遣唐使は？

会場から：とにかく春苑は、その前の年、1年ほど前まで。

古瀬：ありがとうございます。春苑玉成は陰陽道なので、直接暦の博士ではないということもあると思いますけれども、暦と関係は深いですね。だから手に入らなかったかどうかですね。暦はよくわかりませんが、吉備真備が持って帰ってきた唐礼、それが最新の「開元礼」ではなくて、一昔前の「顕慶礼」だったということがあって、最新のものを中国が見せてくれるか、持って帰っていいと許可してくれるのかというのも問題ではないかと思います。

以上です。

飯尾：では加藤先生よろしくお願ひします。

加藤：いまの古瀬先生のものに関連するのですが、藤原刷雄について、古瀬先生は入唐しない、私のほうは入唐したとの説明でしたがということで、それぞれその根拠をとということだと思ひます。私の場合は入唐したというふう考えたのは、私自身のオリジナルな考えではなくて、すでに堀池春峰さんという仏教史学者ですが、その方が藤原刷雄と『藤氏家伝』下をあらわした延慶(えんぎょう)を同一人物として、私は船連夫子であるというふうにおっしゃった藺田さんの説のほうに賛成なんですけれども、その論拠として堀池さんが述べておられるわけですが、ちょうど私のプリントの6枚目の上のあたりに書いてありますので、そこを読んでみます。2行目の、その理由としてというところですが、「その理由として、彼が天平勝宝四年閏三月、遣唐留学生として渡唐するため大使の藤原清河らとともに拜朝し、このとき無位より従五位下に叙せられたこと、恵美押勝の乱の後、仲麻呂の男子のなかで刷雄だけが『少きより禪行を修むる』を以て、死罪を免れ、隠岐の国に流されたとあることを挙げ、天平勝宝四年の刷雄の授けられた位階、従五位下は外従五位下の誤りで」、あるとして、刷雄が天平勝宝四年の遣唐船で留学し、鑑真の門下に入って、延慶と称するようになったと堀池さんは推測されるわけです。それに加えて、このときのいわゆる遣唐使そのものをプロデュースしたのが仲麻呂であろうということで、仲麻呂の性格を考えますと、このとき実際に息子の刷雄が渡唐したのではないかと。もう1つからんできますのは、延慶との関係で申し上げるわけですが、延慶が船連夫子であるとすれば、彼がどういうかたち、請益生だったのかそれとも長期の留学生だったのか、そここのところはよくわからないんですけど、要するに彼をバックアップしていたのが藤原仲麻呂であると。そうしますと、大使が藤原清河で、そして同じ留学生仲間の中に船連夫子、のちの延慶がいる。そういう環境のもとで藤原刷雄自身も渡唐したのではないかというふうに考えることができるわけですが、これはもちろん確証があるわけではございません。ただいまのことに關してはそういうふうに見ていくと、仲麻呂と延慶とのからみみたいなのがわかってくるのではないかということで、私は理解したわけです。

それから、フミヒト系についてももう一度説明してくださいというご質問なんですけど、フミヒトというのは通常フヒトと呼ばれております。これはあくまでも私見なんですけれども、フミヒトというのは6世紀の半ばから後半期にかけて、朝廷に所属して文筆記録の業務に従事するために編成された渡来系の組織、それがフミヒトであるというふうと考えております。このフミヒト、

かなり数が多いわけですが、これを見ていきますと一応皇別氏族のように称しているものもありますが、いずれもあとからそういう形に出自をつくり換えたものでして、すべて渡来系です。しかも東アジアの諸地域の、特に朝鮮諸国、それから中国系と称するものをひっくるめて、そういったものすべての人々が含まれているということで、おそらくその最大の目的は外交の推進にあったのではないかと。つまりいわゆる全方位外交に適應できるような人材を各部署に配置して、そういったものに組織した。例えばフミヒトの中でもいちばん有名なもの一つとして、船氏と呼ばれる氏族がありますが、その船氏の祖先にあたる王辰爾が敏達天皇の時代の最初ですけれども、高句麗から来た国書をほかのフミヒトたちが読めないのを、彼1人がそれを解読して、天皇と大臣の蘇我馬子に絶賛されたという有名な話が『日本書紀』に出ております。これなどはそういった外交と直接かかわるかたちで、国書の作成だとか、高度の文書作成業務に従事するものとして、そろそろ時期的にそういった文筆記録官の存在が必要になりつつあった状況を示すものと考えています。

それからちょうどこの時期は大和政権が各地にいわゆる直轄地、ミヤケですね、国家的な施設であるミヤケを設けている時期であって、例えばこれもフミヒトですけれども、いま言いました王辰爾の甥というふうに書かれていますけれども、『日本書紀』に白猪史胆津が吉備へ派遣されて、白猪屯倉の経営にあたる、という話が出ています。このような状況のもとでそういった、ミヤケだとか港津、渉外施設、それからさらには中央にあつては大王宮ですね、そういうところに所属して、言ってみれば文書行政的な仕事に携わるような集団として、フミヒトの組織というのはだいたい6世紀半ばから後半にできたのではないかと思います。

ちょっと長くなりますが、東漢直の中の有力な一族ですけれども、東文直ですね。これと、それからもう1つは例の王仁の子孫と称しております西文首、これを伴造として、そのもとに大和・河内のフミヒトと呼ばれる集団がつくられていった。ところが『日本書紀』を見てみると、ほとんど活躍しているのは河内のフミヒトのほうでして、しかも河内のフミヒトの中でもつばらががんばっているのはどういう人々かというと、私はこれを野中古市人というふうに称しているのですけれども、西文首、それからその同族である馬史、それから蔵史という一族ですね。それからほとんど同じ地域に住んでいますけれども、隣の、いま言ったのは河内国古市郡古市郷なんです、その隣の丹比郡の野中郷に拠点を構えていたのが船史、それから白猪史、津史、これを野中と古市の地名にちなんで、野中古市人と呼んでいたのだと思いますが、ほとんどこの人々が『日本書紀』の中で活躍が記されているということになります。こういった野中古市人を中心として、あと田辺史を加えたような、河内のフミヒトというものがフミヒトの中心的な存在ではなかったのか。そして、あとは簡単にすませますが、フミヒトというのはただ単に大化前代や律令前代でその職務が終わってしまったわけではなくて、これはレジュメの表にも掲げておきましたけれども、律令制のもとでも、そういう書記官的な職務につき、そして外交だとか、あるいは学者、文人として大いに活躍しているのがこの集団である。ちなみに長官・次官・判官・主典の、第四等官の主典、これは和訓では「フミヒト」です。それからさらにはその文筆記録官の主典の補助にあっています雑任の史生ですが、これも訓がフミヒトですね。さらに言いますとそのフミヒトがなぜ、主典（サカン）と呼ばれているかといいますと、これも朝鮮語のサガン（史官）

に由来するのではないかとされています。だからそういった、ずっと律令制の時代まで継続していく集団であると、そういうふうにもフミヒトをとらえています。したがって、渡来系の諸民族の中で、フミヒトが特に遣唐使だとか、あるいは留学生、学問僧になるケースが多いのも、彼らが渡来系の集団の中ではもっとも当時最先端の知識を身につけていた人々であった。そのことが結局はそういう状況を生み出しているのではないかとというふうにも考えております。フミヒトについてはそういうことです。

あと、非常に難しい質問が2つほどきています。それは阿倍仲麻呂の出自を記した『古今和歌集目録』の記事を疑問視したとして、従来の孝元天皇系阿倍氏が和珥系安部氏の土俵に下りてきたのではないかと。また古瀬さんの指摘にもある太学と四門学というものの差異や、和安部氏が『姓氏録』では左京にのみ見え、本貫地の傾向とは沿わないこと。それから推挙者は職掌関係の必要性からも考えられるのではないかと。以上の3点についてのご質問なんですが、非常に難しいんです。

まず最初に、和安部氏は『新選姓氏録』では左京皇別下に出ています。そして、さらに和安部氏に関しましては、ほとんど一族のもの活動がわからないわけですが、ただ改姓記事が出ておまして、これはレジュメ補遺の2枚目に掲げておきました。ちょうど『姓氏録』左京皇別下とある、ゴシックで和安部朝臣と和安部臣の本系を記したあとのところですが、「和安部氏は大彦命の後裔の阿倍氏と同じく、大和国十市郡安倍の地を本拠とした豪族であるが、こちらは孝昭天皇の皇子、天押帯日子命の後裔と称する和珥氏系の氏で、春日臣・小野臣・粟田臣・大宅臣らの同族である。『続日本紀』によれば、神護景雲二年に、左京人従六位下の和安部臣男綱ら三人が朝臣姓を与えられている」と、わかっているのはただこれだけなんです。ほかに和安部氏に関する記述は一切ありません。そしてこの和安部臣男綱、朝臣姓に改姓したこの一族というの、そこに出てきますように、「左京の人」とあります。それ以外、和安部だとすれば、例えば『新選姓氏録』の大和国皇別のあたりに出てきてもよさそうなものなんです。右京や五畿内のどの国にも、一切出ていません。出ているのはこの「左京皇別」だけなんです。それ以上細かいことはわからないのですが、おそらくは、本拠地は安部という氏名から推して、大彦命の後裔の阿倍氏と同じように、大和国十市郡の安倍の地であったのではないかと思います。答えにはならないんですけど、おそらくはそういう一族で、それ以上細かいことがわからないということですね。

それから、これは私自身もちょっと不安になっていた点なんです。古瀬さんが先ほどご説明されましたけれども、要するに、吉備真備と違いまして、阿倍仲麻呂は太学で学んでいるわけです。これが、日本におけるそういった貴族を出すような家柄に応じて、中国で太学で学ぶことを許されたんだとすれば、和安部氏というのは、その家柄にあてはまらないのではないかと。この改姓した男綱というのは、どういう位であるかという、従六位下です。それに対して例の仲麻呂の父親とされる船守の一族の阿倍氏というのは五位以上を多く出している名門ということになりますから、和安部氏だったならば、これは太学への入学を認められていなかったのではないかとという考え方もできるわけですね。ところが果たして日本でのそういう位階だとか、あるいは身分というものが中国で太学入学の条件になっていたのかどうかということなんです。例えば

膳大丘がいます。これは恐縮ですが、古瀬さんのレジュメを読ませていただきますと、「国子監で学び、帰国後、大学助教となる」と、そういうふうに書かれています。国子監で学んだということは当然、国子学、太学、もしくは四門学といった六学で学んだということですけど、膳大丘という、この人物は少なくとも氏姓的に見た場合には、膳氏の本流にあたる一族はすべて高橋朝臣に改姓していますので、膳大丘の出自は非常に低い身分です。そういうことを考えますと、ある程度推薦者がおれば、つまり中国側にアタックできるようなそれ相応のパトロンがおれば、身分とはかかわりなく入学が可能であったのではないかと。そうしますと、粟田朝臣真人のようなものがバックに控えていたとすれば、たとえ和安部の一族であったとしても、仲麻呂が入学できる資格はあったのではないかと、そういう理解もできるのではないかと考えています。

あとご質問は、職掌関係の必要性からということなのですが、これもいまのところ、例えば職掌関係でもって推挙されることがあったという事例をまだ見つけだしておりません。これも、申しわけございませんが、よくわかりません。おそらくそういう関係もあったのではないかとはいえますけれども、答えになっておりませんが。

それからもう1点。和安部氏の朝臣改姓は768年ということによいのかということ。これは和安部氏の、いま見ました史料ですけれども、和安部臣男綱が、神護景雲二年（768年）に朝臣姓を与えられた。つまりそれまでは臣姓ということになりますね。それに対して阿倍仲麻呂は、安倍朝臣仲麻呂というふうに記されているわけですが、これもやや屁理屈に近くなるのかもしれませんが、例えばレジュメの補遺のほうの最初のところの、阿倍仲麻呂についての記述というのがあります、1ページです。これは単なる偶然かも知れませんが、阿倍仲麻呂に関する氏姓表記というのをAに掲げてあります。①『続日本紀』天平十一年十一月辛卯条には、本朝学生阿倍中満とあります。姓（カバネ）がない。そしてそのあとの、②『続紀』宝亀十年五月丙寅条に、前学生阿倍朝臣仲麻呂とありますが、これは「在唐而亡」ということで、死亡記事ですね。そうしますと、ちょうどこの間にもし和安部であるとすれば、臣から朝臣への改姓が行われているというふうに考えることができる。そうしますと、最初の①の「本朝学生阿倍中満」の表記が姓が省略されたものであったとしますと、これが必ずしも朝臣であったかどうかはわからないということになってきます。

いずれにしろ、阿倍仲麻呂というのは中国では非常な有名人ですけれども、留学した当座はほとんど無名に近い留学生であるわけですし、日本側が阿倍仲麻呂について詳しい中国での活躍だとかそういうものを情報として仕入れていく時期というのは、むしろ晩年に近くなってからだと思うんですね。だからそういったことを考えていきますと、本来入唐したときの阿倍仲麻呂がどういう氏姓であったのかというのは、これはよくわからないわけです。例えば和安部が単に「和」を省略して安部というふうに書かれているんだというのを前提として考えているわけですが、そういうような可能性も考慮してよろしいのではないかと考えています。お答えにはならないんですけど、だいたいそういうふうを考えております。あくまでも憶測にもとづいて言っていますので、阿倍仲麻呂が和安部氏だというふうに100%保証できるかということ、いちばん自信がないのはむしろ私じゃないかと思えます。やっぱり阿倍船守の子でいいんじゃないかなという感じもどこかあるんですけど、なんとなく引っかかってしょうがないものですから、これをこの

際思い切って発表させていただこうということでしゃべったわけです。そのへんでご容赦願いたいと思います。

飯尾：どうもありがとうございました。それでは石見先生お願いします。

石見：私には4通質問がまいるまして。よくあの雑ばくな話に4通もご質問をしてくださったと思います。ありがとうございます。

まず1つは、唐王朝がトルコ系ならば、以前は中国王朝の冊封体制に入っていたはずで、すると同格であった他の中国周辺の国の王は、唐のことを快く思っていなかったのではないか。もともとは同格だったから。それなのに唐の王室ばかりが偉そうな顔をしてということだと思えますが、日本が隋に国書を提出したとき、無礼な書と言われたのは、日本側は王族同士同格だと思っていたからではないか、こういうご質問です。それはたぶん違うんじゃないでしょうか。唐王朝そのものがトルコ系なのかどうかは実はわかりません。北方民族であることはまず間違いないであろうと思いますけれど。隋や唐ができる前に冊封を受けていたということもない。なぜならば、それらの先祖は北魏の六鎮で北方警備をやっていた人たちですから、冊封すら受けられない。冊封を受けるほど立派な人たちじゃない。羊まみれになって暮らしているような人々なんです。それが、別にいいんです、王になったって。アメリカ大統領だって、もとは映画俳優、テキサスの牧場主、しかし大統領になれば大統領なんだ、ということです。

それから、こういうご質問で私はついつい感じてしまうんですが、西嶋先生や、それから西嶋説を紹介された金子先生などには大変申しわけないんですけども、私がいまいる職場が教育学部なので、大学院の授業にも教育学をやりたい院生がいて、いろいろな国々の世界史や自国史のテキストを比べ合わせるというようなことも授業の関係上やることがあるんです。たまたま夏休み前に冊封体制ということがかかわってきて、これらはほかの国ではいったいどうやって教えているのかと思って、みんなで手分けして調べたんです。そうしたら韓国の教科書、つまり韓国の自国史でも、外国史でも、それから中国の自国史でも外国史でも、教科書に「冊封体制」という言葉は一切出てこないです。あれは日本人の概念なんだと思います。彼ら自身はそんなことは教科書には書かないです。外国からお客さんが、使節がやってきて官位をあげる。国王の使節がやってきて、相手の国王に称号を与える。そういうことがあったとしても、それによって義務が生じるような、実質上の関係になるのかどうか。それをちょっと、日本の冊封体制論や西嶋説はそこを強く意識しすぎるんじゃないかという気がするんです。たぶん、武川あたりで牧畜業をやっていたものたちが出てきて政権をとったとしても、周りの国が何だあいつらはって、前からいた中国人はそう思うかもしれませんけれども、それもしばらくたてばやはり政権のほうが強いのであって、だから日本が隋の煬帝に同格の国書を送ったとまでは私は言えないと思います。こんなことでお答えになっているのでしょうか。

それから2つ目は、隋・唐の出自がペルシア系だとすると、それが東アジアの名士になれた条件は何なのかということです。私ちょっと言葉が足りなかったですが、隋唐がペルシア系、ソグド人がつくった国というわけではありません。政権を立てた勢力は、ペルシア系というわけでは

なくて、鮮卑人なのか、トルコ人なのかわかりませんが、出自を隠します。系図を捏造して名門の中国の貴族であるかのように言うわけです。ですから、正確には何系の人たちかというのはわかりません。隋や唐を立てた人たちというのは、皇室だけじゃなくて、その政権を担ったような人たちというのも、おそらくごちゃ混ぜになって南下してきたんだと思います。それがソグド人だというわけではないのです。そのごちゃ混ぜの中にはトルコ人は入っていたのかもしれませんが。そして、それがどうして東アジアの名士になれたのかというのは、隋末の反乱で隋が崩壊して煬帝が暗殺されると隋の皇室というのはほとんど殺されちゃうんですね。煬帝の、まだ当時2歳か3歳の孫だけが生き残ります。それと煬帝の皇后が生き残った。彼らは隋末の群雄の間を転々と連れていかれますが、結局、突厥から使者がやってきて突厥に迎え入れられていきます。亡命ですね。むしろ先祖のことを考えれば突厥に亡命したというよりは、ふるさとに帰ったと言ったほうがいいのかもしいくらいですが。

これらはいったいどういう現象なのかというと、北朝から隋・唐まで、特に唐が突厥を倒して東アジアに覇権を確立するあたりまでというのは、おそらくは普通は中国があって、中国が南北朝で北半分と南半分に分かれていて、そして、歴史地図などを見ると南半分にしっかり色が塗ってあって、ここが南朝だと。北半分にも色が塗ってあって、そこから外は何も色が塗ってなくて、夷狄だというような書き方になっていますけど、そもそも南朝があんな領域なんか持っているわけじゃなくて、長江の中流域から下流域あたりの線しか抑えてない。それから北朝だってあんなに全部を抑えているわけじゃない。その中にはいろいろな史料にあらわれない民族があって、六鎮の反乱のような出来事が起こると史料に出てくるわけです。それが結局、突厥と唐の全面戦争に至るというのは、あの時代はおそらく中国の世界とモンゴリアの世界というように分かれる時代ではなくて、南モンゴリアと華北で形成される地域が1つの地域なんです。その争いがずっとあって、そこが史料にずっと残ってきている。ですから最終的には突厥と唐の戦いになって決着がつくんです。それも安史の乱で、また崩れるわけです。というふうに見るのが実情に近いんじゃないかと思います。

ですから国境線を設定したらだめで、いまの国境線は近代国家になって引かれるものです。以前は国境なんていうものはないんですから。国境にあたる場所には、両文化圏の境目の、2つの文化が混じり合っている人たちがいるわけです。それがまた1つの独自の文化圏をまたつくるわけですから。『魏志倭人伝』に出てくるような人たちは、朝鮮半島の南部と北九州の間にいる境界の人たちなのかもしれません。その境界の幅が広がったり狭まったりしますから、極端に広がってしまうと、五胡十六国から北朝、北朝から隋、唐へというようなことになるんじゃないかと思うんです。そのように考えるべきで、そこに冊封があったの、ないのというような考え方はしないほうがいいと思います。

3つ目のご質問で、ソグド人はもとは農耕民族と言われていますが、のちの突厥支配下や唐代のソグド軍人などの例から、半農半牧の民という可能性はないのかというものです。これは大変鋭い質問なんですね。ソグド人はペルシア人で主として生業は農耕だろうと言われていて、あるいは商業だろうと言っていますが、ソグド人というとすぐ商業だと言いますが、それは都市に住んでいる人はそうかもしれませんが。地方のソグド人の集落は、これは地域によって農耕

をやっているケースもあれば、牧畜業をやっているケースもある。ただこのご質問の中でソグド軍人という言葉が出てきますが、北周から隋、唐のはじめくらいにソグド人の集落に軍府がおかれていくんですね。そういうことから私は、ソグド人で本当に商業をやっているのかなあと、彼らは戦ったら強いんじゃないかなと思ったことがあります。その後いろいろな墓誌などが出てきて、彼らの集落に軍府が置かれていて軍人として出てきているというのが証明されてきたんです。やっぱりそうなんだと思いました。それからソグド人は異常に馬を持っています。さっき言った固原、唐がいちばん最初にそこを抑えて、国営牧場を置いた場所なんです。失礼、2番目の質問です。そこは唐が国営牧場を置いた場所で、当然そこにいるソグド人の牧場を唐は利用しているんだと思います。だからそのリーダーは牧官の職につくんですけど、彼らは通訳もやっていました。最初牧官の職についてその後長安にやってきて通訳を務めるようになっていくんです。ですから、ソグド人イコール商人だ、集落は農業だというのは考えなおしたほうがいいと思います。商人をやっている人もいるでしょうが、主として牧畜業のほうが多いんじゃないかと思います。だから彼らは常にトルコ系などの遊牧民と接触していますから、馬を仕入れるルートなんていうのはいっぱい持っているんじゃないかと思います。そういうのがソグド人の姿じゃないかと思います。

それどころか、最近ではソグド系突厥という言い方をする人があらわれています。これは日系ブラジル人だとか、スペイン系アメリカ人とかというのと同じです。外見や血統は、もとをたどればスペイン人であるし日本人であるけれども、いまは、言葉も生活習慣もすべてブラジル人になってしまっている、アメリカ人になってしまっているというような人です。ですから、ソグド人系突厥という概念は、出自や外見の顔つき、からだつきはペルシア系なんだけれども、生活の文化は完全にテュルクになってしまっているというような人たちです。こういうような人たちが、突厥が減んだ後、中国に、唐に入ってきた人たちの中にはこういうものたちがたくさんいるということがわかってきました。安史の乱でも彼らは動いています。北京の周辺で鼻が高く外国人の顔の人たちが大量に死んでいるという記事があります、戦場で、安史の乱のときです。それらは、昔ならばソグド人が商業をやっていて何で戦をやっているのかと思うかもしれませんが、そうじゃないんですね。商業をやっている人もいるでしょうけれども、牧畜業にも完全に馴染んでいて、軍事力としての一翼を担っているというようなソグド人だっているわけです。そういうような人が戦になると動きだすんですね。こんなところでいいでしょうか。

それから、基礎的な質問ですけども、下記の民族の違いを教えてくださいという。鮮卑、突厥、匈奴、韃靼、ソグド、ウイグル、タタール。これ、わからないものがたくさんあるんです。北方民族でいちばん古く漢文史料に出てくる、それも遊牧帝国をつくったような、強力な力を持った民族としていちばん古いのは匈奴だと言われています。次が鮮卑で、柔然で、突厥で、ウイグルでと、こうきますけど。それからキルギス。そして少しわからなくなって、韃靼が出てきて13世紀にモンゴルということです。これで何系の民族かがはっきりわかるのは突厥以降です。それはどうしてかという、彼ら自身が書いた文字が石に刻まれていて、それがいまから100年以上前にデンマークの言語学者が、どうしてああいう文字を解読できるのかわかりませんけれども、解読したらトルコ語なんです。そこで、トルコ語をしゃべっているトルコ人であろう、突厥

というのはテュルクの漢字音写であろうということがわかってきたんです。で、次のウイグルと言いますのは、漢文で突厥というのはテュルクの漢字音写ですけど、テュルクの中でも、カガーンを王にしてその支配下に入っている人を突厥と言っています。そのもっと北だとか、離れたところには同じテュルク系でカガーンの支配下に入らない、漢文史料の書き方だと突厥の中に入らないテュルク人もいて、彼らは彼らで部族を形成しています。その部族の1つがウイグル部です。突厥が減んだあとモンゴリアをウイグル部が支配しますので、住んでいる人はあまり変わらなくても国としてはウイグルと呼ぶようになるんです。これはモンゴルだってそうです。モンゴル部族の中の、キヤト＝ボルチギン氏族の中のテムジンという名の人物が統一したので、だから支配下に入っている人はその前とあまり変わらなくても全体的にそれをモンゴル部の国だということでモンゴルと呼ぶようになるわけです。ウイグルも文字を残していますから、これもトルコ系であることは間違いありません。その前の鮮卑や匈奴はわかりません。鮮卑はモンゴル系だなどと教科書に書かれていますけど、あれはうそでわからないというのが正確です。それから韃靼というのは、のちのモンゴルにつながる勢力だろうと言われていましたし、タタールの音写が韃靼だろうというのでいいんじゃないかと思います。ソグドは、先ほど申しましたとおり、中央アジアに代々住んでいるペルシア人です。

それからもう1つ回ってきたんですが、遣唐使が派遣された長安は、私が先ほどお話ししたとおりに、国際化された都市だと思われるけれども、それ以前に六鎮の乱をきっかけに力をつけた、李氏のような鮮卑の成り上がりが国をつくったので周囲の国に対して開放的な国家になったのか、というものです。これは、一因としては、そういうことが言えるんじゃないでしょうか。魏晉南北朝の名門貴族の李氏がつくったのであれば、外の民族は入ってこないでくださいという国になるかもしれないですね。皇室だけじゃなくて政権をつくった勢力のほとんどが外から来た人たちです。彼らが文字も書けないのに中国人の官僚を駆使して支配をやらせるわけです。そういう国だから、別に何が来たってかまわないよというような性格の社会になるという、そういう社会になった一因としてはあり得るかもしれないです。

こんなところでよろしいでしょうか。

飯尾：どうもありがとうございました。もう1つ、矢野先生だろうと思いますが、井真成についての質問がありました。昨日の公開講座とかかわるんでしょうか。答えられるところでお願います。

矢野：答えられないでしょうね。ご質問の要旨は、井真成墓誌というものの銘は、鑑真を日本へ導いた栄叡のことではなかろうか、というご指摘でございます。井真成というのはだれかというのは随分議論があります。きょうの議論の中でもずっと出ていました。留学生であるという議論もありますし、もしかしたら留学僧ということも考えられるかもしれない。隣におられます石見先生なんかは、必ずしも遣唐使で船で長安にやってきたとは限らないかもしれないというようなことで、これはさまざまな可能性が考えられているわけです。栄叡というのは第10次遣唐使で入ってきた人物ですけれども、その可能性はあまり高くはないのではないかという気がいたしてお

ります。その根拠とされておりますのは、龍興寺に栄叡の碑があるということなんですけれども、これと井真成の墓誌を直接結びつけるのは媒介にする史料でも出てこないかぎり、いまのところは難しいのではないかというふうに思います。これが1点でございます。

2点目は、717年養老元年に第9次遣唐使の随員、長期の留学生として井真成というのは長安にやってきたんだと、私どもは考えているわけですけれども、ご質問とかご意見なんでしょうか、養老元年第9次遣唐使の間に、阿倍仲麻呂、玄昉、吉備真備ら、留学随行の一員に、井真成が含まれているとされているけれども、この一行には井真成は含まれていないのではないかと。墓誌を別にすれば日本側の記録にも、中国の公的な記録をひっくり返してみても出てまいりませんとあります。まさに謎の人物、突然千数百年の時空を超えて出現してきた人物なので、確かにそうなんですけれども、私ども、これは可能性の問題として、いつも、古代史なんていうのは史料の少ないところですので、いくつかの可能性を立てては、よりこちらのほうが可能性が高いというやり方で議論を進めてきております。そういう意味では、1つは私どもが主張している、717年養老元年の第9次遣唐使の随員として正規の長期留学生として入ったという可能性と、もう1つ、きのうの公開講座のほうでもお話しましたように、中国の研究者のかなりの部分が、第10次遣唐使つまり天平5年、733年ですね、本来であれば井真成を迎えにきたはずの遣唐使の請益生といえますか、短期の留学生としてきた。しかし、遠く波濤を越えて長旅をやってきたので、長安にたどりつくやいなや死んでしまった、そういう人物ではなかろうかというような説もありまして、昨日はそういったところをご紹介したわけです。しかしこれも率直に申し上げまして、そうであるとも、そうでないとも、いまのところお答えができません。私の非力ということもありますけれども、きのう申しましたように、井真成の研究というのは細かく議論を詰めてきていますけれども、正直申し上げまして、井真成から東アジア世界を見通すなどというのはなかなか難しい。荒木先生がこのシンポジウムあるいはこの企画の中で、東アジアという大きな枠組みの中で、それから少し時間軸を伸ばして、井真成の問題も、私は責任者でチームリーダーということなんですけれども、こつこつとやるつもりではおりますが、大きな東アジア世界の中でとらえていってみようといったところで、5年続きますかどうかわかりません。精一杯やってみますので、その中で終わりのころにまたおいでいただいて、矢野さん、どうなったというふうに聞いていただければと思っています。

飯尾：ありがとうございました。

これでひとわり質問用紙についてのお答えをいただいたわけですが、最後のほうにこのプロジェクトに対するご意見とか、こういう方法はどうかとか、あるいは今回のシンポジウムに対するご批判なり、全体的なことの時間をとっておきたいので、個別報告に対する質問を会場から受けるという時間がほとんどなくなってしまうりましたが、どなたか、個別の問題についてご指名いただいてご質問ください。あるいは、先ほど質問用紙に対してお答えいただいたんですが、あれでは不満だという方もいらっしゃるかと思います。そういうことを少し受け付けたいと思います。手を挙げて発言していただければ。

会場から：荒木先生に。

昨日のレジュメの中で、これは3番目のものです。玄昉のことについて書いてありますが『開元釈教録』と経論5000巻の関係、一切経についてお教え下さい。

荒木：いまのご質問は、レジュメの玄昉の解説についてのものですが、これは、岩波書店の日本史辞典を参考に挙げさせてもらいました。ご質問の点は、『続日本紀』に吉備真備がどういうものを持って帰国したのかが書かれているのも参考になると思います。またいま日本の古代史研究では、写経所の研究、天平写経も含めての一連の写経研究というのが非常に盛んでございます。その中で、どういうお経をどこで、どんなシステムでまたどんなメンバーによって写されているのかが分ってきております。おそらく、岩波の日本史辞典の玄昉の説明は、その成果が反映しているのでしょう。この時期おそらく『開元釈教録』をもとに経論のいわばリストでチェックをかけ、写経作業を進めていったのでしょうか。唐で流布している経論を『開元釈教録』をたよりにして、5000巻の一切経を玄昉が日本にもたらした功績は大であることから、岩波の日本史辞典の解説をここでは載せて、真備がどんな人物なのか、そして玄昉がどんな人なのかを知ってもらうために載せた次第です。

飯尾：ほかにいかがでしょうか。では、またありましたらそのときにでも。

金子：先ほど石見先生のほうからあまり冊封、冊封と言わないほうがいいんじゃないかという話がありましたが、実は私全然言わなかったことがありまして、これは唐以前の正史には冊封という言葉はほとんど出てこないということなんですよ。『新唐書』に2例ありますけれども、明らかに熟語として冊封と読める例は1つか0かという。ですから、この冊封というのは、実は史料から集めて定義できる言葉じゃないんですね。私は報告の最初に書いておきましたけれども、日本の歴史をいかに東アジア世界という視野の中で展開するかということを理論化するために、西嶋氏が明清時代の用語を積極的に使ったんだろうと思うんですね。冊封という言葉を使っている人は中国人の研究者でもあります。向達という有名な『唐代の長安と西域文明』（1957年）という古典的な本を書いた人がいますけれども、その本の中にも冊封という言葉が使っておりまして、中国の研究者でもやっぱり使っている方はいるんですね。ただおそらく、順序から言うと明清時代の用語を古い時代に転用したんだろうと思うんですね。

それからやはり東アジア世界という言い方にしましても、李成市さんの『東アジア文化圏の形成』という本を紹介しましたが、この中では、韓国などでは東アジア世界という発想は大東亜共栄圏とどう違うんだというふうな、つまり西嶋氏の真意とは全然違う受け取り方をされている、こちらにとってみれば残念なんですよけれども、そういうふうな理解のされ方もある。そういう紹介もあります。

東アジア世界という言葉が日本でこれだけ定着して、井真成の問題にしてもそういう東アジア世界の中で我々が考えていこうというときに、結局これだけ人口に膾炙して一般化した冊封という言葉も、史料にはないながら、できるだけ有効な学問的用語として活用していくことはあつて

いいと思います。その場合には、どういうものを冊封とみなすかということも含めて活用していくということを考えないといけない、と私個人は思っております。以上です。

飯尾：ありがとうございます。もうすでに東アジア世界史という全体のほうに入っているかと思いますが、私も石見さんにひとこと言いたいことがあります。冊封はたしかに理念的な言葉なんですね。強いて挙げるとすれば、「冊命封建」というのがいちばん当たると思います。冊命というのは周代に王が諸侯などに命令することを冊命と言い、その命令の内容が封建ということなんですね。だから冊命封建というのは冊封ということに理念としてはいちばん近いというふうに思います。

それから西嶋さんが、『中国史を学ぶということ』という本でだったと思いますが、その中の同名論文に、特に「日本史との関連で」という副題がついているんですけども、要するに一国主義、一国史とか、そうでなくてもあるいは交渉史とか、比較史というようなことを挙げて、これはいずれもだめなんだと。要は世界史が必要なんだということですね。東アジア世界史がやっぱり1つの有効性があるかどうかというのは、これから問われるんだと思いますが、1つの理念的なテーマといたしましうか、そういうものは必要なんだということです。それが実態とかけ離れてしまってほとんど意味がないということであれば、仮説として挙げた用語が有効性をなくしたということで、葬り去ればいいだけの話なのです。ただその過程として、1つの仮説として、それが成り立つかどうかは別問題としても、それを立てるというところに意味があった。私たちは実はそれをやりたい、このプロジェクトでやってみたいというので、東アジア世界史というふうにあえて名前をつけたということをご承知おきいただきたい。このように思っているのですが。

司会者が一方的に報告者に非礼なことをしてしまいました。申しわけありませんでした。

石見：東アジア世界とよく言われますけれども、そのような世界はあるんですかね。唐から見ると、圧倒的にまず北が重要で、次に西が重要で、東なんかどうでもよくてですね。唐から見ればどうでもいい東の国々と唐とでもって形成される東アジア世界というものがあるのだというのは本当なんですかね。

飯尾：とても重い意味のある、いいご意見なんだと思います。それこそが、東アジア世界史が有効なのかどうかというのが、いままでもやられてきましたし、この5年間での私たちのプロジェクトでも、1つの中心のテーマにおそくなっていくだろうと考えています。たしかに金子先生が、西嶋さんと堀さんの学説をまとめてくださったときに、東アジア世界の範囲ということで、両者の間で範囲のとらえ方が違っていました。西嶋さんの範囲は共通する漢字文化圏といったらいいでしょうか。

しかし、そういう世界に比べれば、中国王朝の存立に非常に大きくかかわったのは、先ほど言われたような北の世界、それから西域の世界だということになります。だから堀さんは、東アジアの範囲というものを西嶋説よりも広げた。そういうことと、地域の問題として、じゃあ東アジアというのは有効性が本当はないのかどうかという問題、および東アジアに限定した場合に東ア

ジア世界というものを質的なものとして、例えば先ほど挙げたのは漢字文化ということだったわけですが、そのほかにいったいいかなるものが存在するのか、といった点を金子先生に紹介していただきました。いま石見先生がおっしゃったような、現実問題としての北と西、たしかに中国王朝は北アジアそれから西域について気をつかいますが、東と南についてはほとんど何も無いと言ってもいいかもしれません。こうしたかなり大きな差があるなかで、東アジア世界史の意見をどのように位置づけるかが、問題となるのだと思います。

荒木：石見先生の言われ方、当たっているんですね。日本史の私らもそれなりに、中国から見たときの東方観という問題や西方や北方の問題が、おそらく言われるとおり、同等のものとして位置付けられてないということは、中国史でも常識ですし、日本の古代史をやっているものでも、ある程度は知ってはおります。ただ問題は、東アジア世界というのは、極端に言えば地理的には現実にあるわけです。日本は中国の南にあるわけでも何でもないですね。明らかに海のかなたの東側にあるわけです。ただ、そういう世界が例えば西嶋先生が言ったような冊封体制論で説明がつかない部分があるとしても、西嶋先生が日本をアジア世界の中において考えていくときに、こういう概念を用いて考えようとした姿勢は、やはり忘れてはならないのではないかと。その概念は、金子先生がおっしゃられたように、堀先生の東アジア世界像とも若干ずれてくる部分もある。分析概念というのはあくまでも分析のための道具でしかないというぐらいの発想に立って、足らざる部分は補えば良いのではないかと。

そのときに東アジアというエリアを設定したときに共通項でくるという気持ちは私自身はあまりないんですけども、それぞれの国は固有の歴史を背負って、歴史を展開しています。7世紀、そして8世紀、9世紀には、朝鮮半島でも3国のうちの2国が滅び統一新羅になり、その新羅も10世紀減んでいきます。日本はそれと異なり王朝交代はないわけですが、他方で海のかなたに渤海という国も建国されている。その渤海もやはり10世紀に滅びる。こうした歴史を見ていくときに、例えば留学生という視角を設定したときに、東アジアを構成している国々の留学生が、どのように中国との関係を持つのか。また、それぞれの国が他国とどのような関係を持つのかという、東アジアの国際関係史次元で考える場合、どういう法則が貫くとかいうレベルの問題になってくれば、おそらく諸説出てくると思います。しかし、関係がある以上、これは当然「世界」はあるんです。

今回のプロジェクトでは、留学生にスポットを当ててみました。それは、彼らが、どういう文化を媒介し、物を持ってくるのにどんな役割を果たしたのだろうかという関心に根を發します。こういう問題を1つひとつときほぐしていく中で、アジアの中の関係を人と物との、物流、人流の中で、東アジアの国際関係史が描けはしないだろうかと考えてみました。したがって、「課題」に示したように、「東アジア世界史」のうしろに「留学生」がつくのが、着眼点です。この着眼点が唯一有効な方法であるというわけではありません。ただ、1つの分析軸として考えてみる有効性は、今日のシンポジウムでお話をうかがって、私は私なりにけっこう確信を持たせていただきました。9世紀、10世紀への接続のさせ方は、古瀬先生の報告とも関わり、いつぐらいにいわゆる今日の日本文化というようなものが形成されてくるのかという問題であります。最近では9

世紀頃ではないかと言われるようになってきました。私はもう少し後にずらしたほうがいいと思うんですが、今日子どもが常識で考えるような文化の形成や、今日まで通じるような美的感覚などは、9・10世紀にはじまる。日本は朝鮮三国そしてその後の新羅、また渤海や中国から学んできたものを咀嚼しながら9世紀、10世紀ぐらいに文化形成を遂げていくわけです。まさに日本のものが生まれる一方で、新羅は新羅で統一新羅という成熟期を迎えていきます。「もの」だけが、いきなりスッとくるわけではないのです。介在するもの、これを人で押さえれば、留學生が1つの分析の大きな基軸になるだろうと考え、テーマに設定した次第です。

さらに一方で、東アジアという地域設定をしたのは、私たち、日本史研究者が入って一緒に考えるには東アジアが最適という条件があります。東アジア世界が何かの法則で貫かれているのか。先ほどの西嶋先生の考えもあり得るわけですが、そういうものが結果として出てくるかもしれない。が、出てこなくても関係はあります。それが時期によってどういう変化をするのかを見ることも大切です。それでも、東アジア世界の300年を貫く法則を私たちが見つけることを目的にしている研究ではないということだけは、ぜひご理解いただければと思います。

松原 朗：要するに、中国にとって北と西が大事であったというのは、これは軍事的な意味で驚異となるのは北と西しかなかったわけですし、つまりその意味で言うと中国が自分の対等の交渉相手と考えているのは、それはもう北と、特に北でしょうが、西であるに違いないわけですね。東のほうの国というのはその意味では怖い国はまったくないですから、だから別に相手をしなくてもいいけれども、向こうからくるのであれば相手をしてやろうと、そういう関係であったというふうにまず考えていいと思うんです。

これはいまのことを考えますと、中国人はよく自分は東方文明であると。その東方文明という中には日本も含まれているんでしょうけど、日本というのはほとんど眼中にないですね。自分は東方文明の名士であって、西方文明、いまはアメリカが代表しているというふうに中国は考えています。

私は中国の文学をプロパーにやっているものですから、本当に東アジアなんてどうでもいいということになるのですが、東に属していて、留學生を送って中国からいろいろなものを入れることによって初めて文明化されてきた。そういうコンプレックスを抱きながら、中国と何とか対等の地位を築こうと考えているのが、結局東アジアであったということですので、私は荒木先生が、中国の東にあるから東アジアという概念設定ができるという、それは間違いじゃないんですが、あまりにも消極的すぎると思います。やっぱりそうではなくて、東アジアに漢字、あるいは律令体制、あるいは中国化された仏教というものが広がった。その意味で有効な概念なんです。ただそれが中国からしますと、東なんていうのはどうでもいいと、いまはアメリカだけ相手にしていればいいと、それと同じような感じを中国人が持っているということです。

飯尾：どうもありがとうございました。

シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア：1分30秒だけ。いま中国のほうから見るとというお話で

したけれども、ひとつヨーロッパから見ればということお話しします。東アジアというのは英語でイーストアジアですね。ヨーロッパではイーストアジアというのは大学とかでは、とても一般的に言われていますし、その意味は、ここもそうでしょうけれども、中国と朝鮮、韓国と日本です。アメリカのほうですと、大学のほうで1年生、2年生はまだどちらか、シノロジー、つまり東洋学とか、ヤパノロジー、ジャパニーズスタディーズとかいうふうに、1年生、2年生はまだ選ばないで、イーストアジアスタディーズになります。それが終わったあとに3年生になると、ジャパニーズスタディーズとかチャイニーズスタディーズに入る。そのために、中国から見ると不思議なようですけれども、ヨーロッパとかアメリカから見ると、東アジア圏、つまりイーストアジアは、どこでも通用しています。

飯尾：ありがとうございました。

私たちのプロジェクトも、世界史として意味があるんだな、というふうに思いました。

鈴木靖民さん、最後にご意見をお聞かせください。よろしく申し上げます。

鈴木 靖民：私は日ごろ専門分野を日本古代史と名乗ったり、東アジア史と名乗ったり、間違われて考古学というふうに言われることもあります、考古資料を使うからですけれども。いま非常にホットな議論が展開されて、シャルロット先生も、もうがまんできなくて立ち上がってしまわれました。私はどの先生もおっしゃることが正しいなと思って聞いていました。私自身、冊封という言葉はやはり限界がある概念で、冊封体制というものも問題だろうと思います。ともかく、いちばんハードな点は、司会の飯尾先生が言ってしまったのですけれども、東アジア世界史研究と名乗ったのはこのプロジェクトがたぶんはじめてではないですか、日本では。いま話題にならなかったけれども、私の知っているかぎり、中国では日本だけでなく、韓国との関係があるせいだと思いますが、大学や研究機関で、東アジア研究所とかを称するところはたくさんあります。特に有力な大学で多いですが、日本研究所がない場合もあります。先ほど金子先生が西嶋先生の東アジア研究の研究史を述べられましたが、戦後の1960年代、日本がどこに位置してこの先を進んでいかれるのかという現実の問題に対して、それを歴史学の立場から石母田正先生が提起し、それを、漢代の人々をランキングする二十等爵制の研究のある、西嶋先生が東アジアの秩序構造を考えたところに研究の出発点があるのですね。そういうことがもとになって、しかも日本および日本人というようなアイデンティティがありますから、そうした視点から日本や朝鮮を歴史に逆照射するというか、歴史に照らした成果が冊封体制論であり、古くは日本の前方後円墳論なのだろうと思っています。

私たちは、いま、21世紀の初めの日本と世界の危機的状況にあって、あらためて日本なり中国なり朝鮮なり、それぞれのところからもう1回歴史とか文化をとらえなおす必要があります。特に研究者は研究者なりの方法とか立場でやればいいたろうと思っています。専修大学は、2004年、幸いなことに西北大学と学術交流がはじまったばかりでしょうか、そこで、西安市の東のほうからまったく偶然に、きのう王維坤先生からお話があったと思いますけれども、井真成の墓誌が見つかった。墓誌が本物かどうか怪しいという方もおられますが、でもそのおかげで、交流が進み、

3年後に東アジア世界史研究センターが成立し、きのうも、きょうも大勢の市民の方も含んで、関心をもつ研究者もみんな来ているわけです。そうした引きつける力が、この具体的な歴史資料もそうですし、ここに立ち上げられた研究プロジェクトこそは、それだけいろいろな可能性を持っているんだとお見受けしました。そしてすでに国際的な共同の成果として、矢野先生にいただきました、『長安都市文化と朝鮮・日本』という本が、中国で先に出版されて、ごく最近汲古書院でも出された。もとは『アジア遊学』の特集のようですが、そういう成果もあり、2年前の井真成の墓誌のシンポジウムの成果も、朝日新聞社からも出ておりますから、形になることを着実にやっておられます。研究プロジェクトを拝見しますと、荒木先生、矢野先生、亀井先生や土生田先生、飯尾先生をはじめとして、私の存じあげている先生方がたくさん参加され、本当に専修大学の人文系の日本でトップクラスの、しかも大学の幹部らしい人もおられます。そういうことで大学全体がバックアップされているわけです。今後大変期待が持てます。

きょう話題にならなかった、中国と韓国での動きにふれますと、冊封体制に対抗する言葉となるかどうかかわからないですが、まとまったものが、辺疆史地叢書で去年出版されております。韓国でも東アジアあるいは東北アジア云々という研究やシンポジウムが行われることが多くなりました。だんだん変わってきた中で代表的な例を挙げますと、このいただいた本に論文を書かれた、陝西師範大学の拝根興さんは中国人で古代史研究ではじめて韓国の慶北大学校に留学して博士の学位をとられた方です。こういう国際性に富んだ人まで専修大学はプロジェクトの仲間に、包摂しておられるわけです。そうした新しい全体史としての東アジア史の追究、東は取ってもいいと思いますけれども、アジアというのは何だろうと、アジアの中で日本は何だろうとかいう気運が、もう日本の周りの国々も出てきておりますので、日本と東アジアの歴史を気にする私としては、専修大学がその拠点になるのは悔しい気もいたしますけれども、そういう狭い根性ではなくて、どうしてもいろいろな人も協力する必要があると思っております。私は今後の研究活動に大いに期待しております。失礼しました。

飯尾：時間もだいぶ超過してしまって、本来なら報告者の方に一言ずつと思ったのですが、その時間もなくなってしまいました。これで第1回のシンポジウムは閉じさせていただきます。また来年度も開催いたしますので、その折にはぜひご参加ください。本日はありがとうございました。終わります。